

房総の文学と作家

《伊藤左千夫》を中心として

川 村 優

わたくしは、文学専攻ではなくあくまでも歴史専攻の立場から、千葉県出身の明治時代の歌人・小説家である伊藤左千夫（一八六四～一九一三）の文学者としての自己形成の一端についてわかりやすく解説した。左千夫研究者の永塚功氏によると「彼は少年期から青年期の過程に特に多感な人生的辛酸をなめた」（『左千夫の文学と文学碑』）としている。永塚氏の指摘をまっまでもなく、彼の文学者としての自己形成の過程は、波瀾に富んだものであったことは否定できない。

今回の講義にあたって、わたくしはまず第一に左千夫の出生地である現千葉県山武郡成東町殿台の自然的・歴史的環境の特質、彼の幼時の家庭環境あるいは修学状況について言及した。その上で彼が明治十八年（一八八五）一月三十日、二十二歳のときの東京への出奔の際に残した「書置候事」の原文をわかりやすく紹介解説を加えた。この「書置候事」は彼の出奔時における切々たる苦悩を端的に表明した重要な書付に外ならない。特に父・母に対するつよい陳謝の心情の吐露とともに、彼が出奔を決意するにいたった背景など、涙なくしては読むことができない。

そこには彼の旺盛なる自立への強い意志表明とともに、やがて「牛飼い」という激しい肉体労働の生活環境のなかにありながらも、雄々しく文学的開眼への素地となる彼の想像をこえる繊細な思考、

情感を垣間見ることができると、などを指摘した次第である。以上が及ばずながら、今回のわたくしの講義の概要である。

国木田独歩の文学

宮 本 文 彦

- 一、「民衆の詩人」「小民史の作家」、その独歩文学の軌跡
- 二、独歩の「自然観」と「運命論」
- 三、銚子と独歩、その「生誕の秘密」

国木田独歩は、明治中期の浪漫主義からやがて自然主義に移る過渡期における、日本近代化の時代相を背景に純粋で強烈なヒューマニズムと個性あふれる文学を展開した異色ある作家である。総じて、独歩は、明治社会の中枢部から遠い山林海浜の「小民」や、明治社会の落伍者の人生の内に「人情の幽音悲調」と「ヒューマニズム」を達観した作家である。いわば、卑賤なもの、庶民の名もなきものへの愛惜、悲惨な運命をもそれを自然としてうけいれようとする態度、生きた自然への開眼、天地の悠久に対する人間の有限観と、そこからくるヒューマニズム、同胞愛、そういったものを独歩は、鋭い知性と感性と豊かな浪漫的心情をもって表白していったユニークな文学者であるといえるであろう。